

三遠南信サミット2019 in 南信州 住民セッション

住民目線で語り合おう 三遠南信の現状と未来

2019年3月27日付けで第2次三遠南信地域連携ビジョンが策定されました。この中のプロジェクトの1つとして「県境を越えた住民交流機会の創出」が示され、これに三遠南信住民ネットワーク協議会として協力していくことになりました。

そこで、今回の住民セッションでは、三遠南信地域の現状と課題、魅力や地域づくり活動などを住民目線で語り合い、意見交換しながら、未来に向けてあらためて地域を理解し、情報を共有する場としました。

三遠南信地域の地域づくりや交流・連携などに関心のある多くの方の参加をお待ちしております。

日時 2019年10月30日〔水〕
10:00～12:00(受付9:45から)

参加無料

三遠南信地域の地域づくりや交流・連携などに関心のある方ならどなたでも参加できます。

会場 飯田市鼎文化センター 3階学習展示室
(飯田市鼎1339-5)

プログラム

開会あいさつ

- 住民セッション趣旨説明
- テーマ別話題提供と意見交換

3つのテーマについて、それぞれの話題提供者が発言し、それに関わる意見を交換します(各30分程度)。各テーマに沿って話題提供と意見交換を順次進めていきます。

- ①文化芸術の可能性 大脇 聡氏(NPOてほへ・東三河)
- ②伝統芸能の継承 関 京子氏(元天龍村柚餅子生産者組合・南信州)
- ③獣害と暮らし 小山舜二氏(鞍掛山麓千枚田保存会・東三河)

- まとめ
- 閉会

【申し込み方法】

裏面の参加申込書に必要事項を記入し、EメールあるいはFAXにてお申し込みください。



主催 三遠南信住民ネットワーク協議会

問い合わせ 東三河交流ねっと(2019年度事務局) TEL 080-1600-8140(平川) Eメール sen.jumin.net@gmail.com

三遠南信地域住民セッション 要旨

■ 開会あいさつ

南信州和合むら 吉田 弓氏

本日は遠方から来ていただきましてありがとうございます。2019 年度の代表世話人の吉田です。午後のサミットに先立ちまして、午前に住民セッションを開催いたしますが、サミットではまず全体会があって、そのあとに「住」（防災）を主題とした連携検討会が行われます。今回の住民セッションでは、主に「住」（くらし）に関する内容で進めていくことになりました。活発な意見交換をできればと思いますのでどうかよろしくお願いいたします。



■ 開催趣旨

愛知大学総合郷土研究所 平川雄一氏

今回の住民セッションは「住民目線で語り合おう 三遠南信の現状と未来」というテーマです。実は本年度は第 2 次三遠南信地域連携ビジョンのスタート年でありまして、これからおおむね 12 年にわたって、三遠南信地域の連携事業などがこのビジョン（計画）に基づいて進められていきます。三遠南信住民ネットワーク協議会も世話人を 3 圏域から選出して 1 年半の間、検討委員としてビジョンづくりに携わらせていただきました。この新ビジョン（冊子）はこの 6 月に関係する行政、経済団体、住民団体などにすでに配布されています。本日午後のサミットでも配布される予定になっておりますので、まだお手元に届いていないからその時にご覧いただくとして、ビジョンの中には、主要なプロジェクトの 1 つとして「県境を越えた住民交流機会の創出」が示されていまして、これに三遠南信住民ネットワーク協議会



として協力していくことになりました。

こうしたことなどをありまして、今回の住民セッションでは、三遠南信地域の現状と課題、魅力や地域づくり活動などを住民目線で語り合い、意見交換しながら、未来に向けてあらためて地域を理解し、情報を共有する場としました。

また、今回のサミットは、全体会後の連携検討会で「防災」がテーマになっています。この場でもそれに関連したことに触れながら進めていくことができればと思います。

■ テーマ別話題提供および意見交換

【テーマ①「伝統文化の可能性」】

NPO 法人てほへ 大脇 聡氏

NPO てほへはプロの和太鼓集団「志多ら」のファンクラブが立ち上げた NPO です。「志多ら」は結成して 31 年目で結成直後に奥三河東栄町にたまたまのご縁で拠点を移して、そこを生活の場としながら廃校となった小学校を活用して、日本を代表する和太鼓集団の 1 つとして大きなプロ集団として活動しています。



現在、舞台上に立っているメンバー、研修生、スタッフを含めて約 20 名は全国から集まり、有限会社志多らという企業として活動しています。ただ、和太鼓チームとして自分たちが活動するなかで、地域に根ざしたプロの和太鼓チームになりたいということで全員が住民票を東栄町に移した移住者です。地元の民俗芸能である花祭りにも参加し、私も遂に保存会の会計を仰せつかり、役員となりました。メンバーたちは 11 月に入るとすぐに花祭りがありますので、昨日の夜から本番に向けて練習を開始しました。このように私たちは地域住民としても活動しています。

男性メンバーが 40 代になるまでは消防団に加入して地域の中の若者として活動しています。全国各地から東栄町にやってきて 10 年、20 年とプロの演奏者として活動してその後舞台を下りたら、ふるさとに帰ってしまうのかということ、せつかく根付いた地域の活力が低下してしまう恐れがあります。そういうことがないようにしたいということで将来を見据えて、「志多ら」のメンバーや地域の若者に仕事を提供できる場も兼ねた NPO 法人を立ち上げました。

今回のテーマは文化芸術の可能性です。私からの話題提供は、「人は生きていくために文化は必要ですか」。人が人として人らしく生きていく、豊かな心を持って生きていくことに文化芸術や伝統芸能は、昔は芸能が仕事ではなかったもので、芸能は地域の中の自分たちの思いなどを形にするためにあったと思いますが、現代は職業に就いて、文化芸術が仕事として成り立つ時代になっています。なぜ人が文化を創造してやってきたか、なぜ私たちみたいにプロとしてもやっているかは、芸能人のように舞台上で興行したり、創った作品を観たり舞台の上での演奏を聴いてほしいと当然思っています。これはプロやアマを問わず、ほんとに思いがあってやっている人たちは何かを伝えたい、何か新しい創造を生み出してみたい、過去から今までに感じてきた思いを、未来に向けて新しい形で創造してみたいということが、舞台に立つ人たちの根底にあると思っています。

その想像力を見に来た人、出会った人は、新たな作り手の側の想いと観る側の想いはいつも一緒ではありません。作り手は「こういう想いを伝えたい」と考えながら作品を創りますが、観る側の人それを観てその時その人の状況などに応じてその作品をどういう視点で見るか、元気づけられるか、新たな発想につながることや自分の地域に帰ったら何か影響があるのでないかと、充電するような新

しい想像力を見つけるきっかけになるのが文化を創造することではないかと思っています。

私たちはプロとしてやっているの、奥三河での生活の中で自分たちが感じ取った想いや未来に向けて社会や子どもたちに伝えたいこと、未来に向けて挑戦してみたいことを和太鼓という邦楽という形を使いながら発表しています。これが文化芸術の可能性ではないかと思っています。

奥三河には私たちみたいに仕事として芸能としてやっている人たちがいます。アマチュアでやっている人たちもいます。三遠南信地域は伝統芸能の宝庫といわれているので、場所がそういう人たちを呼び込んだと思います。だから新たな想像力が発揮され、新しく伝えたいことが作品としてできあがるのだと思います。三遠南信地域をはじめいろんな地域のみなさんが、発表の場を用意していただいたり、会場に足を運んでいただいたりすることで、伝統文化は支えられ、可能性も広がっていくと思います。

私たちは地域や次代を担う若者たちのためにも、いろんな団体とどんどん連携をしていろんなことをやっていきたいと思っています。それをやりやすくするために「志多ら」のファンクラブを NPO 法人化しました。

また、伝統的なまつりや文化活動は、世の中の景気が悪くなり、経済活動が活発でなくなると置いておかれます。生きていくことで必死ですので、そんなことやっている場合ではないという方が多いと思います。それで本当にいいのかというのが疑問でもあります。そうした課題もありますが、文化芸術の可能性が少しでも広がるように連携を進めてきたいと思っています。

合唱劇「カネト」をうたう合唱団

花井幸雄氏・渡邊美津子氏

合唱劇「カネト」をうたう合唱団は、三遠南信地域を貫く鉄道飯田線の前身三信鉄道の三河



川合から天竜峡までの測量と一部工事を手掛けたアイヌ民族の「川村カネト」氏の半生を描いた合唱劇「カネト」を飯田線沿線の豊橋、豊川、新城、飯田をはじめ、名古屋や旭川などの各地で公演しています。東三河地域に拠点を置いています。2007年の飯田公演後、飯田カネト合唱団を結成しました。現在は浜松公演実現に向けて活動しています。



こうした新しい形態で三遠南信地域の自然、文化、歴史などを伝承することによって、次代を担う若者の活躍の場を創出することが可能ではないかと考えています。

【テーマ①意見交換】

NPO 法人浜名湖クラブ 小林 昇 三遠南信は古くからいろんな文化があると受け止めました。三遠南信ではこんな新しいことが考えられるのではとっております。



法政大学 高柳俊男 カネトをうたう合唱団は、最近子どもたちの応募が少なく集まらなると聞きました。これはなぜでしょうか。



渡邊美津子 児童はやってみたいと思っていますが、クラブ活動や習い事などがあり保護者が積極的ではありません。今は保育園児に声をかけています。

ひさかた風土者代表 長谷部 三弘

飯田市では年1回「いいだ人形劇フェスタ」が開催され、海外の劇団も参加し、国際的にも評価されている行事となっています。地元小中学校（劇団クラブ）も参加し、人形劇フェスタを通じて人間形成が図られているのではないのでしょうか。



吉田 弓 文化芸術が無くなってしまえば人は人ではなくなってしまうと思います。小さい子どもの頃から感動する気持ちや楽しさを

大人が子どもに伝えられるような地域社会になることを望んでいます。

鞍掛山麓千枚田保存会 小山舜二 「志多ら」や「カネト」の活動は、私たちの年代からするとまだまだ新しい文化です。私も村づくりには文化が必要だと思います。ただ単に1つものだけではなくて新しい形とつなげ、魅力を高めることで、みんなを引きつけ三遠南信に伝わる文化などを広めていくことができると思います。

【テーマ②伝統芸能の継承】

元天龍村柚餅子生産者組合 関 京子氏

先ほど言われたように、私も民俗芸能を含めた文化というのは、置き去りにされてきたような気がします。産業や経済も大切ですが、三遠南信の関係では



道路が整備されてよくなりました。それまでは豊橋や浜松に行くには時間がかかっていた。今では早く行けるようになって嬉しく思いました。しかし、近年、全国で起こっている大きな災害のことを考えますと、文化はどこでも「その次」になっているのではないかと感じてしまいます。

そうならないためにも、行政や政治家、企業を巻き込んでいくことは大事です。住民が勉強して、伝えるべきものは伝えていくことは必要があるのではないのでしょうか。イベントで終わってしまったら意味がありません。

どこでもそうですが、子どもは減っていき、人口も増えずに減ってきて、消えそうになっているお祭りもあちらこちらにあります。経済性も必要ですが、伝統文化を継承するには、やっている住民のみなさんが勉強しながら考え行動していくことが必要です。県境を越えてみんなで想いを1つにして動いて、「やってくれない」「理解してくれない」などと思うのではなくて、みんなで知恵を出し合って行動に移していくことを考えていくことが大切で

す。合唱劇「カネト」は、廃校になった旧坂部小学校を会場にして合唱劇をやってくれました。和太鼓集団「志多ら」も素晴らしい演奏を披露してくれました。

イベントだけで終わらずに、せっかくの三遠南信の交流ですのでみんなで助け合って様々な問題を1つ1つ解決していくことができると思います。私の住む天龍村坂部は11軒で14人しかもういませんが、何とか維持しています。みなさんのおかげで頑張っています。みんなと一緒に頑張って大事なことを学んでいければと思います。

【テーマ②意見交換】

川名ひよんどり保存会 前嶋 功

浜松市には、2013年に浜松市無形文化財保護団体連絡会を発足しまして現在会員数が24団体です。2016年には全国で初めて浜松市民俗芸能の継承及び振興に関する条例が制定されました。市町村合併後の新浜松市として無形民俗文化財の保護にも力を入れていただいています。私の住む引佐町川名も中山間地域ですので若者も子どもも非常に少なくなっています。数年前に浜松市山里いきいき隊として女性が派遣されてきました。その彼女が「祭りに参加させてください」と言ってきました。しかし600年続く川名のひよんどりは伝統的に女人禁制でした。川名の集落の人たちにこの話を受け入れるためにはどうしたらいいか相談しました。丑三つ時にご本尊の薬師如来様に相談しましたところ、その件については許すというお言葉をいただいたような気がしました。そのような経緯を経て女性の参加を認めることになりました。

その後、地元の浜松学院の学生が春野町の勝坂神楽に参加して継承の手伝いをしていることがわかりまして、私どもも大学にお願いに行きました。こちらでも学生が参加できるこ



とになり、別の地区の若者も参加いただいているのが現状です。

洪川の歴史と文化を守る会 伊藤八右

これからの後継者問題は大変で悩んでおります。江戸時代には74軒300人くらいいましたが、現在は36軒90人くらいで、子ども



もほとんどいません。舞は20番までありましたが、今は13番しかありません。大人の舞は何とかなるのですが、一番困るのは子どもの舞です。引佐北部小中学校（一貫校）に通っている子どもたちをお願いして地域外から手伝いに来てもらっています。夏休みと正月の本番にむけた年末に3日間ずつ練習して舞を覚えてもらっています。寺野ひよんどりは450年くらい前から始まったといわれていますが、何とか努力してこれからも五穀豊穰、無病息災を祈願できるように祭りが継続できるように努めていきたいと思っています。

吉田 弓 私の住む集落の和合念仏踊は、2017年に国の重要無形文化財に指定されました。私は和合地区に移住して20年が経ちます。今は驚くべきことに和合の集落に移住者が増え、念仏踊り保存会の会長はじめ集落の人たちが移住者の祭り参加を認めてくださって仲間に入れてもらっています。メインの部分はすでに若い世代が継いでいます。この4月に来たばかりで、まだ念仏踊りをみたことのない移住者にも踊りに参加するように要請されました。

これまでそういう様子を見てきましたが、伝統芸能はその時その地域に必要なだから、時代に合わせて変えていく柔軟な対応が重要なポイントではないかと思いました。ですから形を変えながらも残ることができたのだと思います。変化を受け入れられずに頑なに伝統を守ろうとすると、その地域の祭りは消滅していくように感じます。変化を受け入れた和合の念仏踊りは残っています。和合の念仏踊りは跳んだり跳ねたりしますのでほかの地区の念

仏踊りよりもハードです。参加者が20代、30代でよく動きますので、今は活気にあふれた祭りとなって継承されています。長年継承されている中山間地域の祭りは、神様と一緒にやってきたものですので神様やご先祖様は喜んでくれる気がします。

NPO 法人浜名湖クラブ 細川佳伸 三遠南信のいろんな地域に足を運んでいて、魅力のある地域だと感じています。「ひよんどり」に参加する機会があれば参加してみたいとも思っています。かといって、文化や芸術にふれあう機会をつくりたいという気持ちがありますが、実際にはふれあおうとする人たちがなかなか少ないのが現状です。もっとうまく魅力を伝えて、興味を持つ人が増えればいいと思っています。それがどのような方法かはこの場にいるみなさんも考えられていると思いますが、私は若い世代としてなにかできることがあればやっていきたいと考えています。



大脇 聡 2019年を最後に東栄町布川の花祭りが休止となりました。その布川地区は、NPOでほへの元理事長の出身地区であったことや息子の友人の関係で花祭りのお手伝いをしていました。花祭りも以前までは女人禁制でした。各花祭保存会で様々な議論があったようでしたが、継承のために徐々に解禁して地区外の住民や女性（子どもから大人まで）の参加を認め始めました。休止することを含めて、それは各保存会が必死に考えた結果です。休止の判断については、周りではいろんなことをいう人たちがいましたが、そこに柔軟に考えること、新たなことを考える能力、形を変えながらも進化していくことのできる事が大切なことではないでしょうか。

それから東栄町に住み続けて祭りがなぜ大事なのかと考えると、地域コミュニティの中心に祭りがあって祭りをを行うことで地域の子どもから大人まで、自分の居場所がそこにあ

ります。子どもにとってみると祭りという社会の中で大人として扱ってもらえる感覚が生まれています。それがあると地域や祭りに誇りを持つことができ、「自分がいるから祭りができる」「自分がいないと祭りはできない」というような気持ちにさせます。東栄町の子どもたちにアンケートをとると、ほとんど子どもが花祭りのことが大好きです。都市部や地元に住みながらなど、いろんな形でできれば将来は花祭りに関わりたいという気持ちがあります。道路整備が進んだおかげで、普段の生活は地域外でも祭りに関わることができたり、地元で生活し祭りに参加しながら、地域外で仕事ができたりと、今では生活スタイルも多様になってきました。この地域は「伝統芸能も盛んで、未来に向けたビジョンを持ち、新たな取り組みも進めているところで、新しい形を取り入れている先進地域であること」を情報発信していくこともよいと思います。

小山舜二 私の地元の新城市四谷には天竜川水系で始まったとされる念仏踊りがあります。現在28戸で若い衆が15人いますが、昭和30年の36戸のときに若い衆が11人しかいない時期がありました。その時は踊りを続けるかどうかについては、票を取って決めたことがありました。結果は6対5で存続となりました。そういうこともありまして今でも私の集落では踊りを続けるために中学2年になると踊りに強制的に参加することにしてそれで守っています。そうは言っても少子化ですのでこの先はどうなるかは判っているつもりです。何処の地区でもそうですが、周辺の組では1996年頃に踊りをやめていきました。私の組ではやめた組の若い衆を誘って手伝ってもらっています。しかし伝統芸能は同じような踊りでも組が違くと踊りもすべて違います。慣れてもらうのは大変ですが、何とかやって、頑張ってもらって、踊りを継続しています。

隣村の田口や清崎などでは念仏踊りが復活してきています。私は文化がなければ村は成

り立たないと思って踊りを継続しています。しかし盆踊りが続いているなかでの問題は、踊りの内容（念仏・とり唄）を知っているのが私1人しかいないことで、それを誰かに継承したいが誰も手を上げる者がいません。ですから病気もできないのです。

【テーマ③鳥獣害と暮らし】

鞍掛山麓千枚田保存会 小山舜二氏

鳥獣害の被害は、2000年頃からイノシシが全国的に見られるようになりました。私なりにいろいろ調べてみますと、いくつかのことが考えられます。まず、その頃からキツネがいなくなりました。また、イノブタが増えてきました。もともとイノシシを品種改良してブタにし、多産系にしました。例えば野山に出てイノブタになったら乳があるだけは子どもを産みます。その子どもを獲ればすぐに発情します。イノシシの妊娠期間は3月3週3日で、繁殖期は12月頃で4月に出産するものでした。それが今ではそうではないようで、私が12月31日に捕獲したイノシシには5頭の子どもがいました。おそらくブタの血がイノシシに入ってどんどん増えていったのではないかと1つ考えられます。



もう1つはシカの被害です。愛知県では本宮山と茶臼山の2群です。これは昭和30年頃に佐久間ダムが建設されて南アルプスからダム湖を渡ってきて茶臼山に入ってきたのではないかと考えています。私は1993年に稲武町史、設楽町誌の自然編に携わった折には確認しておらず、1996年に設楽町で見たと情報があり、2005年に私の村で確認、2007年頃には旧鳳来町全域にシカが行き渡ったのではないかと思います。シカの生態でいうと今（10月頃）が盛りです。地元を散歩していると10数頭のメスの群がみられます。シカは1年2か月で1頭ずつ産んで拡大していきます。そ

うすると畑が荒らされ、住んでいる人は村を離れていってしまうということになります。それが獣害で一番困っていることです。そうなることを食い止めるためにいろいろ対策をしています。シカは2メートルの高さがあれば柵を飛び越さないが、サルは木があれば2メートルの高さも跳び越えることができます。シカ柵の上に電柵を設置し、そばにある灌木は切ってしまうことをしています。それから無駄な果樹は植えてはいけないということです。人間が取らないような実があるからサルがそれを狙ってやってきます。

それでも獣は増えています。新城市だけの情報を調べてきましたのでお伝えしますと、2018年度のデータで、サル132、イノシシ1,055、シカ548、アライグマ45、ハクビシン195の頭数が駆除されています。それを市町村数でかけるとどれくらいいるのかがわかります。2019年4月から9月までのデータですと、サル69、イノシシ468、シカ107、アライグマ26、ハクビシン78の捕獲数です。イノシシは人間より頭がいいものですから、どこかに穴があれば入り込んでしまいますし、トタンが好きでそれを見るとぶち破ってしまいますので、中々対策ができないのです。そこでシカ用の柵を設置しました。

豚コレラの問題もあります。今お願いすれば村中にも柵を設置することができるのではないかなと思います。今は四谷の千枚田だけは設置しましたのでその被害が少なくなると思っています。あとは公道から入ってくるイノシシをどうするか。それから千枚田の見物客が増えてシカ柵のドアを開けたままにして去っていくことでも問題が生じます。

皆さんたちの地域ではどのような対策をされているかを教えていただければと思います。

【テーマ③意見交換】

つみくさの里うるぎ 後藤和彦 売木村では村で何とかしようと2011年から鳥獣害対策が行われる

ようになりました。村の広さは43.43㎏で、7集落あります。住民たちで全村にワイヤーメッシュ柵を設置しました。資材費は行政、労役は各集落の住民でした。人口は約600人で住民がみな出られることはできませんので、設置完了までに2年余かかりました。今は5年くらい経ちますが、やはりシカは利口です。国道や県道、村道は塞ぐことができませんから、そこから入り込みます。夜は7~10頭のシカが畑に入ってきて食害の被害にあっています。稲以外の農作物を食べていきます。林道は入口に扉をつけて人間しか入れないようにしてあります。



イノシシは2011年以前からものすごく多かったです。猟友会のみなさんが罠を仕掛けて捕獲しましたし、豚コレラの問題もあって少なくなってきたような気がします。

小山舜二 いろんな鳥獣害対策がなされていると思いますが、皆さんの中で自動車に全損保険をかけておくことをお奨めします。新聞配達の軽自動車はここ5年で4台廃車となっています。シカは車のヘッドライトに目がくからみますのでぶつかりやすいです。私の集落では村づくりの一環として、「車両保険にはいっておきましょう」(笑)と言っています。

㈹ネットワークうるぎ 後藤由行

動物と車の衝突事故はありますが、シカとぶつかっても車が傷むだけで済んでいます。相手(シカ)はなんともないです。



小山舜二 とにかく動物は多いです。うちの集落の畑の中では、野菜を作ることは全くできません。檻を作ってその中で野菜を作っています。どの地域でも同じような状況だと思います。ここ1年で檻の仕掛けでは2頭しか捕獲していません。イノシシは利口です。なかなかワナにかかりません。仲間の耕作意欲をなくさないために花火を使って大きな音を出して追い払ったりもしています。獣害と

はいいますが、イノシシなどからみると人間が悪いと思っているかもしれません。

それからもう1つありまして、山の上の杉やヒノキを切り、そこで生活する動物たちの生活の場をなくして邪魔をしているのは人間です。ですからその広葉樹は切ってはけません。そこで力を貸してもらったのが新城市にある横浜ゴムでした。そこでは工場から排出している二酸化酸素を軽減するために敷地内に木を植えて、どんぐりの苗木を育てたりしています。またいろんなところで植樹の活動をしていますし、四谷の千枚田にビオトープを作って環境保全活動をしています。社会貢献事業に協力するというのもあって、各地の山にもどんぐりの苗木を提供してもらって植樹しています。どんぐりなどエサがある年は、イノシシの里への出現は少ないので、こうした広葉樹を植える活動も鳥獣害対策の1つになると思います。

NPO 法人地域づくりサポートネット山内秀彦 先日のお話の中で、植林した木が生長し森が管理されていないので、猛禽類たちが山にいる小動物を見つけることができず、威嚇などの効果が薄れてきたと聞きました。個体数の減少につながらないので獣害が増えているということで、新しい発見でなるほどと思いました。

小山舜二 それから豊根村では狩猟免許を持たない農業者でもわなを設置できる環境省の「わな特区」に認定されていて、講習会を受けて狩猟免許保持者の指導のもとでくくりわなを設置することができまして、効果が出てきているという報告があります。

かわなの里ほぐせんぼ 安戸 守男

昔と比べると環境が変わってきました。私の時代は山に薪を取りに行きました。人間が山に入ることによって動物は警戒して人里に下りてくる数は少なかったです。地元の切山でブタを飼っているところでは、イノシシが



やって来て、それ以来イノブタがたくさん出てくるようになりました。現在は生活環境がだんだん変わってきて山も荒れてきました。

うちのイノシシ対策は、水田にはソーラーを付けて1年中デンボクを張りました。ところが一番困っていることは、うり坊がデンボクの下を通り抜けて入って刈った草の下にいるミミズを食べに来ます。シカは水田が柔らかいときに食べに来ます。ウサギも来ます。

いろんな話を聞くことができました。イノシシやシカはたいしたことはない、食べさせてやったという考えでもいいと思います。私の棚田ではイノシシがのたうち回って全部なくなってしまう。シカは苗が小さいうちはバリカンで刈ったようにきれいに食べ尽くします。シカはシキミ以外ではササなど何でも食べます。人間も動物も生活がかかっていますので共存共栄ということです。

後藤和彦 獣害以外にもトリの被害もあります。下伊那漁業組合では天竜川のカワウ被害が発生しています。長野県の猟友会と協力しながら年間100羽くらいの個体調整をしています。今年で3年目になります。カワウはイノシシと同じように利口で、銃を向けると高いところに飛ぶとか、猟友会のベストを見ると逃げていきます。カワウは20年くらい前まではいませんでした。今は300羽くらいの群れで天竜川の上空を常に飛んでいます。個体調整しましたので佐久間ダムのほうから飛来数は減ってきました。しかし今度は上流部からやって来ます。最近では支流にも来るようになりました。売木村の川ではアオサギとカワウが5~6羽は来ます。漁協では3,000万円くらいかけてアユなどを放流していますが、その半分くらいは食害にあって甚大な被害を受けていると考えられます。7~8年前までは売木村には営巣地はありませんでしたが今はできてしまっています。これも温暖化の影響など、人間が自然環境を壊した影響ではないかと思われま

す。イノシシやシカなどだけでなくカワウなどの鳥被害もあることをお伝えしておきます。

■まとめ

NPO 法人三遠南信アミ 水島加寿代氏

ちょうどいい時間となりましたので、このあたりまでとしたいと思います。今回は文化芸術、伝統芸能、鳥獣害の3つのテーマで話題を提供してもらい、意見交換をいたしました。3つともすべて関係していることがよくわかったと思います。文化は「その次」になってしまうという指摘がありました。経済優先の世の中で災害が起きると伝統芸能など文化的なものは後回しにされてしまうということも心配です。「防災」と「文化」を結びつけた議論も必要であることも忘れてはならないと思います。



三遠南信地域は山、川、海があり、密接につながっている地域です。恵まれた地理的環境の中で暮らし、過ごしてきたことが民俗芸能に表れ、それに魅せられてきた人たちがそこから生まれたものを文化芸術にして評価され、多くの人たちに感動を与えてきました。きっと動物たちも感動して人里に下りて来たのかもしれない。

動物と人間がどのようにして共存していくのかについて答えは出ませんが、ここで終了としたいと思います。

動物と人間がどのようにして共存していくのかについて答えは出ませんが、ここで終了としたいと思います。

■閉会あいさつ

NPO 法人地域づくりサポートネット山内秀彦氏

これで午前の住民セッションを終わりたいと思います。非常に内容のあるものでした。現場でそれぞれ感じていることなどの深い話を聞くことができました。



このようなことを積み重ねていって新しい活動を見出すことでできればと思います。本日はどうもありがとうございました。